

八王子市／帰還するシニアの地域貢献を支援する ——「はちおうじ志民塾」の展開——

一橋大学大学院商学研究科教授 関 満博（せき みつひろ）

高齢社会を迎え、各地で興味深い取り組みが重ねられている。東京都八王子市、首都圏最大の郊外都市として知られる。人口57万人を数えるものになってきた。もともとは織物産業都市であったのだが、現在は首都圏外延部の住宅都市、学園都市、さらにハイテク企業集積都市として知られている。

市内には21の大学が立地し、若者の多い町なのだが、他方で都心に通うサラリーマンが大量に住んでいる。そして、高齢化で話題になる多摩ニュータウンの一部も八王子市にある。さらに、今後、団塊組のリタイアが進み、その人びとの地域への帰還が課題になってきた。



志民塾の開会

定年を契機に地域で活躍

ただし、この人びとは若く、経験も豊富な場合が多く、従来型の「生涯学習」では持ちそうにない。地域社会に積極的に参加していくことが求められている。また、そのようなシニアの方々自身も、企業社会から地域社会に戻り、それまでの経験を活かしながら社会貢献をしていきたいと願っている場合が少なくない。

このような課題に対して、先行的には北九州市の「生涯現役夢追塾」の取り組みが知られている。この「夢追塾」は、従来の「老後を楽しく」といった高齢者対策とは趣をガラリと変え、戦後の高度成長期を支えてきた「団塊世代」を、定年を契機に地域の活性化の場面で活躍してもらおうというものである。

「起業独立コース」「NPOコース」「指導者育成コース」などのコースを設置し、2006年からスタートしている。毎年50～60人のシニアが参加し、活発な学習、交流が重ねられている。私自身も毎年、「夢追塾」の初回の講義と最終回のパネル

ディスカッションなどを担当してきた。1年を塾で過ごした人びとは表情が輝き、新たに起業していったケースも少なくない。日本の高齢社会の新たなあり方に対する、一つの先駆的な取り組みとして注目されている。

このような課題は全国的なものであるが、首都圏郊外都市の代表格である八王子市において、八王子の特性を活かした「はちおうじ志民塾（しみんじゅく）」が2009年6月13日にスタートした。北九州市の「夢追塾」の実績を研究し、八王子型として組み立てられていた。

30人のシニアが集い、スタート

「はちおうじ志民塾」の募集のパンフレットには、『「はちおうじ志民塾」は、生涯学習ではありません。わたしたちが大切にしていること、それは“学んで来たこと、身に付けて来たことを地域で活かす”こと』『50歳から考えるその先の私』と記されている。

募集定員は40人、対象は「志のある50歳以上の方」とあった。6月から8月までは「ベースプログラム」と称し、専門課程に進む前に自身の経験や能力を再確認し、自分の「海図」（進むべき道）を探す場としている。これは受講者全員に対して、毎週行われる。「コミュニケーションスキル」「人生の棚卸し」「50代からの身の丈創業」「地域を育む活動」などのメニューで構成されている。

その後、9月から11月にかけては、選択制の専門課程となり、「コミュニティ・ビジネスコース」「地域コーディネーター養成コース」「創業コース」の3つのコースが用意されている。企画・実施は八王子市市民活動推進部協働推進課とはちおうじ志民塾プロジェクトチーム、後援はサイバーシルクロード八王子となっている。

2009年6月13日（土）の開講式には、30人の方が参加してきた。最年少は38歳、最高齢は81歳であり、平均的には60歳前後の方が大半であった。女性は2人参加している。私の「これからのアクティブシニアの生き方」という題の講演から始まり、オリエンテーション、各人3分の自己紹介、懇親会と夜更けまで続いた。

参加者の自己紹介では、「定年退職し、半年経って持て余している」「昨年、会社を辞めた。創業しようと考えている」「20年ほど海外勤務だった。コミュニティの中で核になる媒体を作りたい」「もう一度、外に出たい」「現在、ボランティアで活動しているが、NPOか会社にしたい」「一生、働きたいと考えている」「何か地元に貢献したい」「数年先の定年後のソフトランディングを考えて入った」「地域の中でつながりをつくりたい」などと語っていた。

ビジネスお助け隊が支援

この事業を支えるのは、「はちおうじ志民塾プロジェクトチーム」。八王子市市民活動推進部協働課の職員と5人の「ビジネスお助け隊」のメンバーで構成されている。2007年秋口から17回の準備会を重ねてきた。

昭和40年代の頃から急速な宅地化、人口増に見舞われた八王子市では、学校建設と下水道の敷設に追われ、特別な産業政策を実施したことがなかった。現市長の黒須隆一氏が登場した2000年以降、地域経営の中核に産業政策が置かれ、産業ビジョンが作られていく。そして、その具体化に向けて、民間組織の「サイバーシルクロード八王子」が設置されていく。以後、八王子は多様な興味深い展開を重ねてきたのであった。

そのサイバーシルクロード八王子の中に「ビジ



フュージョン長池の富永氏も講師メンバー

ネスお助け隊」がある。税理士、中小企業診断士、弁理士等の多様な領域の専門家たちから構成され、約60人が参加している。フワーク軽く、ボランティア的に市内中小企業の経営の支援をしている。振り返るならば、この方々は少し前に地域に戻り、社会貢献を深く意識する人びとであった。「志民塾」に参加する人びとの少し先輩ということなのであろう。

講師陣の一人で、多摩ニュータウンで興味深い取り組みを重ねている「NPO法人フュージョン長池」理事長の富永一夫氏は、オリエンテーションの席上「自分は、10年ほど前、皆さんより少し早めに地域に戻りました。無理をせず、できること、やれることを足し算していくことです」と激励していた。

「驚き」と「感動」の予感

この「志民塾」の一つの興味深い特徴は、プロジェクトチームのお助け隊のメンバーが、講師であるとともに、3人が受講者として加わっていることであろう。彼らはプログラムを作成していく過程の中で、「自分が受講したくなった」と語っていた。

シニア世代の彼らは、すでに地域に戻り、起業

しているのだが、自分の経験を踏まえながら、「自分が受けた内容」をプログラムに積み上げてきたのであろう。5人全員が受講を希望したのだが、日程の折り合いから3人が受講生となった。講師が受講生になるという興味深い船出となった。

良質な住宅地として発展した東京の郊外の八王子周辺は、現在、成熟の時を迎え、新たな生活様式を作り出しつつある。また、この多摩地域はいつの間にか、日本の先端に行くハイテク企業集積ゾーンにもなってきた。

大手企業の研究開発部門が集積し、さらに、多様なハイテク中小企業や新たな生活様式をリードする新たなタイプのビジネスも大量に育ってきている。成熟社会、高齢社会に向かう日本のモデル的な意味を深めている。まさに、日本産業のハイテク化の先導的な役割に加え、わたしたちの「未来」を支える新たな生活様式を生み出す担い手となってきたというべきであろう。

そして、そこに実に多様な経験を重ねてきた人びとが帰ってくる。これらの人びとを地域が受け止め、新たな地域を築き上げていくための「場」を提供していくことの意義は極めて大きい。「はちおうじ志民塾」に集う人びとは、「驚き」と「感動」を予感しながら、自らの「思い」を交歓していた。「はちおうじ志民塾」は、成熟社会、高齢社会に向かう日本の先端として興味深いスタートを切ったのであった。



交流会：“経験を地域に活かす”と語り合う